

保育学生が子どもの表現をとらえる視点  
—保育内容領域「表現」からの考察—

川原 亜津美\*

The Viewpoints of Childcare Students in Perceiving Children's Expressions  
～ Considerations from the Area of Expression ～  
Atsumi Kawahara

要約

本稿の目的は、保育士養成課程に在学中の学生たちの、子どもの表現をとらえる視点について検討することである。さらに、それは保育実習の前後で変化はあるのかについて考察する。その結果から、より効果的な実習前後の授業のあり方についても検討する。

研究の結果、保育実習の前後で、保育学生の子どもの表現をとらえる視点に変化があった。実習において直接子どもと関わる経験を通して、子どもの表情や視線などの些細な表現をとらえることのできる学生が増えると分かった。

キーワード：領域「表現」、子どもの表現、保育実習

Abstract

The purpose of this study is to examine the viewpoints of childcare students in perceiving children's expressions. It will also consider whether students' viewpoints change before and after their nursery school practical training. Based on the results, this study will also examine how lessons should be more effective before and after the practical training.

Analysis of the results indicated that there was a change in the students' perspectives towards children before and after their practical training. Through the experience of interacting with children directly, it was found that more students could perceive delicate facial and eye expressions of children.

Keywords: the area of *expression*, children's expressions, nursery school practical training

---

\* 受理年月日 2021 年 11 月 29 日, 高松大学発達科学部講師

## 1. はじめに

乳幼児期は、様々な経験を通して、感性や表現する力を身につけていく時期である。保育所保育指針に示されている「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の1つにも「豊かな感性と表現」がある。「心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気付き、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲をもつようになる」[1]と示されており、「心を動かす経験」や「表現する喜びを味わう」ことの重要性が述べられている。

保育のなかで、そのような経験を積み重ねていくためには、子どもと直接関わる一人ひとりの保育者が子どもの表現を受け止めたり共感したりすることが重要である。汐見(2020)は『表現』というのは、さまざまな子どもの行為、仕草などを子どもたちの個性的な表現と受け止める保育者がいることにより『表現』になります。そうした保育者の姿勢が子どもの表現力を伸ばす大事な要件になる」[2]と述べている。保育所保育指針の領域「表現」の内容の取扱いにも、「子どもの表現は、遊びや生活の様々な場面で表出されているものであることから、それらを積極的に受け止め、様々な表現の仕方や感性を豊かにする経験となるようにすること」、「子どもの自己表現は素朴な形で行われることが多いので、保育士等はそのような表現を受容し、子ども自身の表現しようとする意欲を受け止めて、子どもが生活の中で子どもらしい様々な表現を楽しむことができるようにすること」[1]と示されている。つまり、保育者には、「素朴な形で行われる子どもの自己表現を積極的に受け止め、様々な表現を楽しむことができるように」援助することが求められる。さらに、保育所保育指針解説には「はっきりとした表現としては受け止められない子どもの言葉や行為でさえも、保育士等はそれを表現として受け止め共感することにより、子どもは様々な表現を楽しむことができるようになっていく」[3]とあり、保育者が遊びや生活の様々な場面に溢れている、子どもの素朴な表現をとらえる視点をもつことは大変重要であると言える。

保育内容の領域「表現」においては、子どもの表出や表現活動、またその指導法などについて様々な研究がなされてきた。特に、音楽表現・身体表現・造形表現のそれぞれの観点から、子どもの自発的な表現やその表現を支える保育者のあり方などに関する様々な研究がなされている。(山口, 2020 ; 河合・森野, 2019) [4] [5]しかし、それらの活動に特定せず、遊びや生活のなかにある、子どもの表現やそれをとらえる保育者の視点に着目した研究はまだ多くない。

そこで本研究では、子どもの表現をとらえる保育者の視点に着目し、保育士養成課程に在学中の学生たちの、子どもの表現をとらえる視点について検討する。そして、それが保育実習を経験する前後で、変化するののかについて考察する。さらに、その結果を踏まえて、より効果的な実習前後の授業のあり方について検討する。

## 2. 研究の方法

保育士資格必修科目である「保育実習Ⅰ」と「乳児保育Ⅱ」を履修している学生を対象として調査する。保育実習Ⅰ(保育所)の実習前後に行う「乳児保育Ⅱ」の授業内のワークシー

トの記述を分析対象とする。学生には、研究目的を説明したうえで、研究への協力依頼をした。承諾が得られた学生のワークシートの回答のみ分析対象とする。(調査対象の学生：37名)

保育実習前後の授業において「子どもは、感じたことや考えたことをどのような方法・活動で表現していると思いますか」という問いを示し、ワークシートに回答させて収集する。その回答の記述を、保育所保育指針の乳児保育の精神的発達に関する視点「身近なものに関わり感性が育つ」の内容と、1歳以上3歳未満児・3歳以上児の感性と表現に関する領域「表現」の内容に沿って、検討する。さらに、それらをカテゴリーに分類し、整理したうえで、実習前後の記述内容を比較する。

また、保育実習後には、学生自身に、自らの実習前の回答と比較させ、そのうえで気付いたことを記述させる。その記述についても分析する。

### 3. 研究の結果と考察

#### 3. 1 保育実習前のワークシート記述内容の結果と考察

学生の記述内容を、保育所保育指針の乳児保育の精神的発達に関する視点「身近なものに関わり感性が育つ」の内容と、1歳以上3歳未満児・3歳以上児の感性と表現に関する領域「表現」の内容に沿って、検討した結果、関連があったのは、以下に示す箇所であった。

保育所保育指針(厚生労働省, 2017) [1] の一部抜粋(下線筆者)より、

乳児保育に関わるねらい及び内容「身近なものに関わり感性が育つ」

(イ)内容

⑤保育士等のあやし遊びに機嫌よく応じたり、歌やリズムに合わせて手足や体を動かして楽しんだりする。

(ウ)内容の取扱い

②乳児期においては、表情、発声、体の動きなどで、感情を表現することが多いことから、これらの表現しようとする意欲を積極的に受け止めて、子どもが様々な活動を楽しむことを通して表現が豊かになるようにすること。

1歳以上3歳未満児の保育に関わるねらい及び内容「表現」

(イ)内容

②音楽、リズムやそれに合わせた体の動きを楽しむ。

④歌を歌ったり、簡単な手遊びや全身を使う遊びを楽しんだりする。

3歳以上児の保育に関するねらい及び内容「表現」

(イ)内容

④感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたり、つくったりなどする。

- ⑥音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう。
- ⑦かいたり、つくったりすることを楽しみ、遊びに使ったり、飾ったりなどする。
- ⑧自分のイメージを動きや言葉などで表現したり、演じて遊んだりするなどの楽しさを味わう。

記述内容には、保育所保育指針にもあるように、「表情」「発声」「体の動き」「音楽」「リズム」「歌」「かく」「つくる」「言葉」「演じる」と関連のある内容が記述されていた。また、その他に「視線」「指差し」「泣く」「笑う」「怒る」という言葉も頻出していた。それらを整理して、12のカテゴリーを作成し、分類した。カテゴリーには含まれないが、複数の学生が記述していた内容については、「その他の行動」としてまとめた。(表1)また、カテゴリー別に、記述していた学生数と記述例を示した。(表2)

(表1) カテゴリー表

	カテゴリー名	分類したワード
1	表情	表情, 顔
2	発声	声, 叫ぶ, 喃語, クーイング
3	泣く, 怒る, 笑うという感情表現	泣く, 怒る, 笑う, 微笑む
4	視線	視線, 目線, 見る, 見つめる, 目を合わせる, 目でうったえる
5	指差し	指差し
6	体の動き	身体, 手足, 腕, 首, 顔, 頭, 身振り手振り, 仕草, ジェスチャー, 走る, とぶ
7	音楽やリズムに合わせた体の動き	音楽, リズム, ダンス, 踊る, ふれあい遊び, 手遊び
8	歌を歌う	歌
9	かく	絵, なぐりがき
10	つくる	作る, 工作, 製作, 造形, 創作, 折り紙, 粘土
11	言葉	言葉, 言う, 話す, 喋る, 文字, 質問, 単語, 擬音語
12	演じる	見立て, ごっこ遊び, 劇
13	その他の行動	

(表2) カテゴリー別の記述していた学生数と記述例

	カテゴリー名	学生数	記述例
1	表情	11	表情で表す。表情で快・不快を表す。
2	発声	15	声を出して相手に伝えようとする。感情がたかぶっ

			ている時に大きな声を出したり叫んだりする。
3	泣く, 怒る, 笑うという感情表現	28	泣いたり笑ったり怒ったりして感じていることを表現する。痛かったり, 不快な思いをしたりした場合は, 泣いて表現する。
4	視線	7	視線で表す。目を見る。大人をじっと見る。
5	指差し	8	指差し行動により, 欲しいものや気になるものなどを教えてくれる。見てほしいものを指差しで教えたりできると思う。
6	体の動き	21	思い思いに体を動かして表現する。頭を横にふって「ちがう」という思いを表現する。手を叩く。
7	音楽やリズムに合わせた体の動き	11	音楽に合わせて自由に体を動かす。手を叩いたり足を踏み鳴らして音やリズムの表現。
8	歌を歌う	10	歌を歌う(機嫌がよくて楽しいという表現)。楽しい時は, 自分で歌を作って歌ったり, ジャンプするなど体を動かす。
9	かく	19	絵を描いて表現する。クレヨンなどを用いて画用紙に思うままに描いたり, なぐり書きをしたりする。
10	つくる	11	ものを作る。作品を作って表現する。実際に見たものなどをつかって再現する。
11	言葉	24	言葉で説明する。自分の言葉で伝えようと単語で表現すると思う。
12	演じる	5	ごっこ遊びなどでイメージする。劇などで表現しようとする。
13	その他の行動		真似 (2名), スキンシップ (2名), 誘導 (2名) 同じ行動をくり返す (2名), 反抗・無視 (3名) けんか (2名), 叩く・蹴る・噛みつく (5名) 物に対する行動 (物を投げる・たたくなど) (4名), 提示 (3名) 遊びのなかで表現 (5名), 食事の盛り付け (2名)

表2より、「泣く, 笑う, 怒るという感情表現」, 「言葉」, 「体の動き」による表現方法を想起する学生が多いことが分かった。

「泣く, 笑う, 怒るという感情表現」は, 子どものサインとして受け取りやすく, 学生も意識しやすいと分かった。また, 「言葉」は, 感じたことや考えていることを表現する手段であり, 子どもはすべてを言葉で表現できないとしても, 単語や一語文・二語文など, それぞれのもつ言葉により, 子どもの内面を表現すると考えられているようである。さらに, 「体の動き」についても, 身振り手振りや首を横に振るなど, 言語発達が未熟な子どもたちの表

現方法として、想起しやすいものであると分かった。

また、カテゴリーには分類できなかったが、その他の行動として、「反抗・無視」「けんか」「叩く・蹴る・噛みつく」「物に対する行動（物を投げる・たたくなど）」に関する記述もあった。「怒っている時など機嫌が悪い時は声をかけても無視をする」「保育者の言ったことを聞かない」などの記述があり、反応を示さないことや大人の思いに反する行動も、子どもの表現であると考えられているようだ。また、一見乱暴にも思えるような行為についても、記述していた学生がおり、子どもの表現は、必ずしもポジティブなものばかりではなく、子どもの葛藤などから引き出される言動も表現としてとらえられていることが分かった。

### 3. 2 保育実習後のワークシート記述内容の結果と考察

保育実習後の回答についても、表1と同様のカテゴリーに整理した。記述していた学生数について実習前後で比較すると、以下のような結果となった。（表3）

（表3）カテゴリー別の記述していた学生数

		実習前	実習後
1	表情	11	20
2	発声	15	11
3	泣く、怒る、笑うという感情表現	28	22
4	視線	7	12
5	指差し	8	13
6	体の動き	21	24
7	音楽やリズムに合わせた体の動き	11	3
8	歌を歌う	10	2
9	かく	19	8
10	つくる	11	6
11	言葉	24	25
12	演じる	5	3
その他の行動			
真似：2名→1名			
スキンシップ：2名→6名			
誘導：2名→5名			
同じ行動をくり返す：2名→1名			
反抗、無視：3名→4名			
けんか：2名→1名			
叩く・蹴る・噛みつく：5名→14名			
物に対する行動（物を投げる・たたくなど）：4名→7名			
提示：3名→3名			

遊びのなかで表現：5名→4名

食事の盛り付け：2名→0名

実習後に記述人数が5名以上増加したのは、「表情」「視線」「指差し」「叩く・蹴る・噛みつく」であった。

実習中、直接子どもと関わる経験をすることで、子どもの表情や視線、指差しといった、子どものさりげない変化や行動に気付き、子どもの表現としてとらえることができるようになったと考えられる。「スキンシップ」の記述を書いた学生も4名増えているが、そのなかには「何も言わずに保育者に近寄る」「何かあれば膝の上に座ったり『抱っこ』とスキンシップで自分(子ども)の中で整理をつけようとする」などがあつた。子どもが保育者の近くに寄ってくること、膝の上に座ったり抱っこを要求したりする行為にも、それぞれの思いがあり、その行為に至る子どもの感情を推測できていると分かる。

また、その他の行動に分類していた「叩く・蹴る・噛みつく」について記述した学生は、9名増加していた。「物に対する行動(物を投げる・たたくなど)」も3名増えている。子どもの「叩く・蹴る・噛みつく」や「物に対する行動(物を投げる・たたくなど)」といった行為は、実習学生にとって、対応に戸惑う場面であり、子どもの強い感情を感じられる場面でもある。子どもの一見乱暴に思える行為も、子どもの表現する手段であり、何か伝えたい思いがあるのだととらえることのできる学生が増えたと分かる。記述にも、「自分が言いたいことが上手く伝わらない時は手が出てしまうこともある」などがあり、乱暴な行為というとらえ方ではなく、伝えたくてもうまく伝えられない思いから、そのような行為に至ってしまったと、子どもの言動を考えることができている。

反対に、5名以上記述人数が減ったのは、「泣く、怒る、笑うという感情表現」「音楽やリズムに合わせた体の動き」「歌を歌う」「かく」「つくる」であった。実習前は「表現」というキーワードから、音楽表現や造形表現を想像した学生もいたが、子どもが表現活動に取り組む姿よりも、学生自身に向けられる、表情や視線などの子どものサインの方が、印象に残りやすかったのではないかと考えられる。

実習前と実習後の回答を自身で比較して気付いたことについては、以下のような記述があつた。

まず、「記述内容が具体的になつた」といった内容が多くみられた。(8名)

記述例：

- ・実習前に比べて挙げられる方法や活動が増えた、また具体性が増したように感じる
- ・実習前は抽象的な回答が実習後にはより具体的な回答になっていることに気付いた
- ・具体的に子どもがどのような方法・活動で表現しているのか考えられるようになったと感じた
- ・実習前の自分の記述より今の自分の記述の方がより具体的にかけているので、その場

面を想像しやすい

- ・実習前と後では後の方が具体的で、実際に現場に立ち、子どもと関わったからこそ分かること、学ぶことがあるのだと感じた

また、実習での子どもの姿を想像したり、考えていたことを体験的に学んだりすることができたという記述もあった。

記述例：

- ・実習で子どもたちがしていた行動を思い返しながら書いたため、「どのような時に」を想像しながら書いた
- ・ほとんど同じようなことを書いていたが、実習が終わったこともあり、その1つ1つがどのような場面で見られたかを実際に体験してみて理解することができたと思う

実習前よりも、具体的に子どもの姿を想像できており、学生自身もそのことに気付くことができています。実習中に「子どもの表現をとらえる」ことができたため、その場면을具体的に想起し、記述することができたのだと考えられる。実習に行くまでは、漠然と子どもの姿を想像していたが、実習を通して、子どもの姿を観察し、さらに直接子どもの表現する姿をとらえて、それに対応することで、より鮮やかに子どもの姿を想起できるようになっていると考えられる。

さらに、子どもによって表現方法に違いがあることや表現方法の多様さに気付いている記述もあった。

記述例：

- ・実習前は「この時に子どもはこのような方法で感情を表現する」というように子どもはみんなこのような行動をするという決めつけたような書き方をしていた。実習後は子ども一人ひとり表現の仕方が違うというように、子ども一人ひとりを捉えたような書き方をしていた
- ・自分から保育者にきてくれる子、あまりこない子で表現の仕方が違った
- ・自分なりに思ったことを単語や真似をするなど、様々な表現方法をすることができると分かった

その他にも、子どもの繊細な表現や些細な変化に気付いたり、子どものあらゆる表現を受け止めようとしたりする記述がみられた。

記述例：

- ・1つ1つの動作に子どもの思いや考えがあった
- ・抱きついたり手を握る力の強さを変えて気持ちを表現してくれることに気付いた
- ・実習前はポジティブな感情の場合のみを想像して考えていたように思います



- ・泣くことは悪いことじゃないと気づいた。子どもたちをしっかりと見ていないと表情に気づけない
- ・実習に行く前の自分は、子どもたちが一人でできる表現ばかりを書いていた。しかし今回は実際に子どもたちの姿を見て子どもたち同士が話し合って思いを表現する、という表現の方法もあるということに気付いた。またその表現によって子どもたちがどんなことを表現しているのかも少し考えられるようになったと思う。

このような記述から、子どもの姿を丁寧に見たり、子どもの繊細なサインを受けとったりすることの大切さに気付いていることが分かった。また、子どもの「泣く」行為やネガティブな感情の表現も、その一つ一つの言動に、子どもの思いがあるのだと理解することができている。また、個々の子どもの表現方法を感じとることに加えて、友達と一緒に集団で表現することもあると気付くことができている。

#### 4. おわりに

本稿では、保育学生の子どもの表現をとらえる視点について検討した。また、そのとらえ方は保育実習を経験する前後で、変化するのかについても検討した。その結果、明らかとなったことを整理する。

第一に、子どもの表現をとらえる視点として、子どもの泣く、笑う、怒るといった感情表現や子どもが発する言葉は、学生にとって子どもの表現としてとらえられやすいことが分かった。また、一部の学生ではあるが、子どもの反抗的な態度や無視する行為も、子どもの表現としてとらえられていることが分かった。さらに、叩く、嘔みつくといった一見乱暴に思えるような行為についても、子どもの表現としてとらえられており、実習を経験してそれに気付く学生もいることが分かった。

一見ネガティブにも思える子どもの言動を、表現として受け止めることは大変重要である。表現としてとらえることができれば、実習中、例えば、子どもに反抗的な態度をとられてしまったり自分の思いが届かなかったりする経験をした際にも、保育者としての自分の力量のなさに落ち込むだけでなく、子どもの内面を理解しようという姿勢を持つことができる。それをもとに、どうすれば思いが伝わるのか、どうすれば子どもと心を通わせることができるのか、と成長に繋がる試行錯誤ができると思われる。また、叩いたり嘔みついたりする行為についても、その子どもに「乱暴な子」などというレッテルを貼ることなく、子どもの内面にはどんな思いや考えがあったのかを考えて、子ども理解に努める姿勢を持つことができるだろう。

第二に、学生が子どもの表現をとらえる視点は、保育実習を経験する前後で、変化があるということが明らかとなった。実習において直接子どもと関わる経験を通して、子どもの表情や視線などの些細な表現をとらえることができるようになっていた。保育者の膝に座ったり抱っこを求めたりといった甘える行為も、子どもの表現としてとらえることができるようになっていた。また、子どもの表現方法は、型にはまったものではなく、子ども一人ひ

とり違うことにも気付いていた。子どもの表現をとらえる視点が幅広く多様になり、子どもの言動の内側にある、子どもの内面をくみ取ろうとする姿勢も身についていると考えられる。

保育実習が子ども理解や保育者としての成長に大きく繋がることは言うまでもないが、本研究を通して、学生の変化をより具体的に再確認することができた。それを踏まえて、より効果的な実習前後の授業のあり方について考えていきたい。まずは、本研究で実施したように、実習前に「子どもの表現」について学生自身が考える機会を作ることである。実習前に書き出すことは難しいとしても、個人で想像したり学生同士で意見を出し合ったりすることを通して自分なりに考えることにより、その後の実習での気づきに繋がると考えられる。次に、子どもの思いや考えていることを想像する経験をすることである。授業のなかで、様々な事例検討を行い、考察することで、子どもの思いをあらゆる可能性から考える姿勢を身に付けておくことができる。そのような姿勢が、子どもの表現をとらえる視点にも繋がるのではないだろうか。さらに、実習後に、実習中とらえることのできた様々な子どもの表現について、整理することである。印象に残っている場面を想起し、改めて自分自身で子どもの思いを考察したり、他学生の意見を聞いたりすることにより、今後の子ども理解や対応に生かすことができると考える。直接子どもの表現をとらえることのできる貴重な機会を、より深い学びに繋げられるよう、実習前後の授業のあり方について、今後も検討していきたい。

本研究では、調査対象とした学生数が少なかったため、今後もさらなる研究の積み重ねが必要である。継続的に調査をすることにより、子どもの表現をとらえる視点やその視点を身に付ける過程について研究していきたい。

本研究のはじめに、保育者には「素朴な形で行われる子どもの自己表現を積極的に受け止め、様々な表現を楽しむことができるように」援助することが求められると述べたが、今回の研究では「子どもの自己表現を積極的に受け止める」というところまでとなった。特に子どもが日常のなかで思いを表現している姿に着目しており、子どもが「様々な表現を楽しむことができるよう」な援助については、まだ研究に至っていない。今後は、子どもの表現を表現としてとらえる視点を出発点として、子どもが楽しい気持ちを歌やダンスにしたりイメージしたものを作ったりするなど、子どもの素朴な表現が、音楽表現、身体表現、造形表現などの活動に繋がり、表現する喜びを実感できるような援助や環境構成について研究していきたい。

## 謝辞

本研究にあたり、ワークシートを分析対象とすることを承諾し、研究に協力して下さった学生の皆様に深く感謝申し上げます。また、執筆にあたり、ご助言を賜りました鳴門教育大学の木村直子先生に深く感謝申し上げます。

## 引用文献

- [1] 厚生労働省 2017年 「保育所保育指針」
- [2] 岡本祐子・花原幹夫・汐見稔幸 2020年 『アクティベート保育学⑩保育内容「表現」』 ミネルヴァ書房
- [3] 厚生労働省 2018年 『保育所保育指針解説』 フレーベル館
- [4] 山口恵美子 2020年 「幼児の自発的な歌についての一考察:延長保育での遊び・生活に着目して」『音楽教育メディア研究』第6巻
- [5] 河合史菜・森野美央 2019年 「幼児の即興的身体表現を豊かにする要因検討:領域『表現』のねらいと内容に着目して」『長崎大学教育学部紀要教育科学』第83号

## 参考文献

1. 秋田喜代美・三宅茂夫 2021年 『シリーズ 知のゆりかご 子どもの姿からはじめる領域・表現』みらい
2. 文部科学省 2017年 「幼稚園教育要領」
3. 内閣府・文部科学省・厚生労働省 2017年 「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」